倭字内外轉札記

古倭　い*　しゐ　のぞ　む

A Note on the Internal and External “Ten” (Chuan), or Transmigration, in the Japanese “Kana” phonetic alphabet

ISHII Nozomu

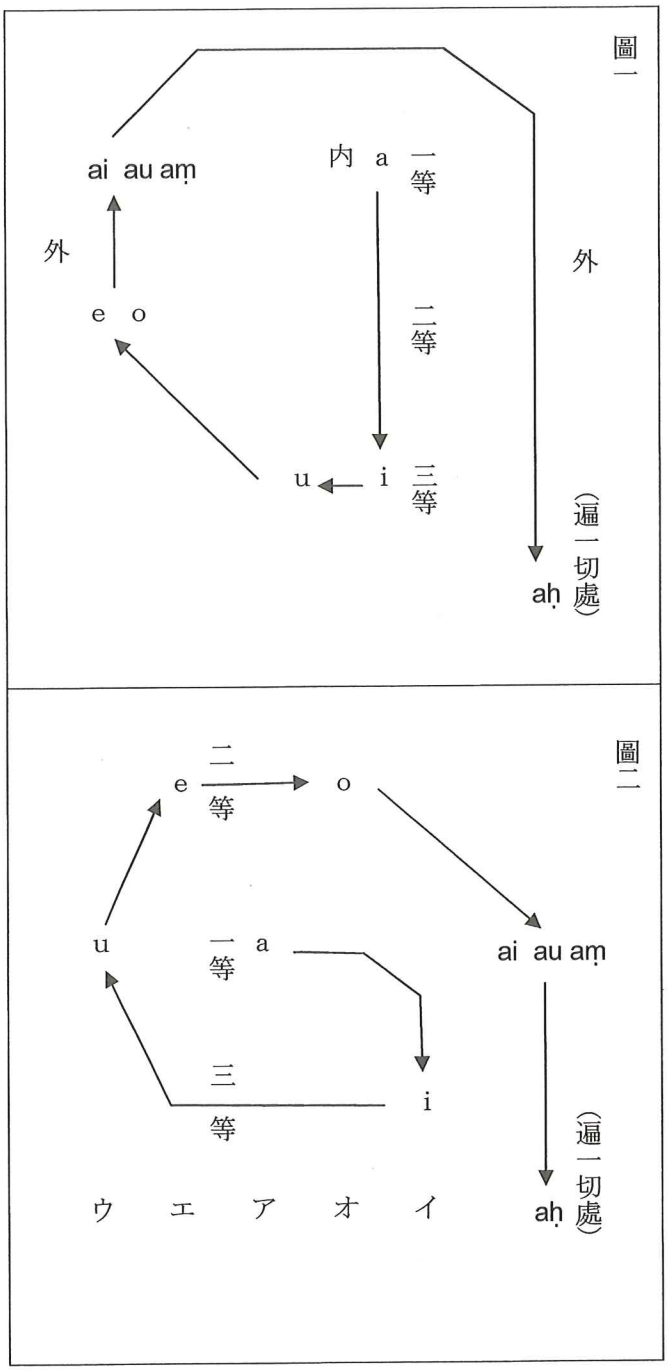
唐開元間大日經並疏謂「a」音最内，「i、u」漸趨外，「e、o、ai、au、aṃ、aḥ」次第繞於外。是爲等韻内外轉，說詳余韻鏡内外轉決疑，載長崎總合科學大學紀要第四十六卷第二號。以日本五十音言之，アイウ爲内轉，エオ爲外轉，五十音圖者，日本内外轉圖也。篇内以旋轉擬韻鏡等第，略如圖一。然而「u」音難配一等，且「a」音不在最内，少嫌牽強。今以「a」爲最内而擬等第旋轉，有日本古本孔雀經音義後附五音例，適見遺法。アイウエオ内外之序，孔雀音例乃列作「イオアエウ」，前人莫釋其義。今以旋轉釋之，適與韻鏡同理。韻鏡一等a爲樞軸，内扇爲三等，外扇爲二等，式如圖二。四等爲贅，可配雙扇之外。強以此式扁而直之如筆，即爲「イオアエウ」矣。旋轉之扁而徑直者，決疑已言「牙齒舌唇」扁爲「唇舌牙齒」。敦煌歸三十字母例亦以與音旋轉爲見審端精知不心曉之序，詳余沈約創定紐位高下說，載輔仁國文學報第二十二期。可徵倭漢等韻，同出旋轉。

今年西曆七月十九日，以此說投日本語學會(原國語學會)，請披講於十一月大會，曾爲所黜。今錄而存之，聊防外人奪功。其詳將投他刊也。平成丙戌西曆八月二十四日識。

和訓文

唐の開元の間の「大日經」並びに「疏」に謂く、「a」音最も内にして、「i、u」漸く外に趨き、「e、o、ai、au、aṃ、aḥ」次第に外に繞ると。是れを等韻の内外轉と為す、說、余が「韻鏡内外轉決疑」に詳らかなり、「長崎總合科學大學紀要」第四十六卷第二號に載す。日本五十音を以てこれを言へば、アイウを内轉と為し、エオを外轉と為す、五十音圖とは、日本内外轉圖なり。篇内、旋轉を以て「韻鏡」の等第に擬す、略ぼ圖一の如し。然り而うして「u」音、一等に配し難し、且つ「a」音、最内に在らず、少しく牽強を嫌ふ。今「a」を以て最内と為して等第の旋轉を擬せば、日本の古本「孔雀經音義」後附の五音の例有りて、まさに遺法を見る。アイウエオ内外の序、「孔

* 工学部　言語教育センター　講師
2006年８月25日受付

雀」音例乃ち列して「イオアエウ」に作る、前人其の義を釋する莫し。今旋轉を以てこれを釋するに、まさに「韻鏡」と理を同じくす。「韻鏡」一等aを樞軸と為し、内扇を三等と為し、外扇を二等と為す、式は圖二の如し。四等は贅と為し、雙扇の外に配すべし。強ひて此の式を以て扁してこれを直にすること筆の如くなれば、即ち「イオアエウ」と為れり。旋轉の扁して徑直なるもの、「決疑」已に「牙齒舌唇」の扁して「唇舌牙齒」と為るを言ふ。敦煌「歸三十字母例」も亦た吳音を以て旋轉して見審端精知不心曉の序を為す、余が「沈約創定紐位高下說」に詳らかなり、「輔仁國文學報」第二十二期に載す。徵すべし、倭漢の等韻、ともに旋轉に出づるを。

今年西暦七月十九日、此の說を以て日本語學會(原國語學會)に投じ、十一月大會に披講せんことを請ふに、すなはち黜する所と為る。今錄してこれを存し、聊か外人の功を奪ふを防ぐ。其の詳は將に他刊に投ぜんとするなり。平成丙戌西暦八月二十四日識す。